

本の壁をつくれ！ 東京図書館



私は昭和60年（1985）6月、パリ大学医学部大学共同図書館を訪れた。前日仏会館館長のLéon Vandermeersch 夫妻の案内で、歯科医学のパイオニア Pierre Fauchard 著『外科歯科医』の手稿の実物を見にいったのだ。

ソルボンヌに接するオデオン街に、ルネサンス洋式の重厚佳麗な医学部の建物がある。高いアーチ窓の長い廊下をぬけて、木造りの頑丈な大扉をあけた。思わず、むせかえる書物のカビくさい臭いにたじろいだ。吹きぬけの巨大な空間の向うに、床から仰ぎみる天井まで、網目のような書架が、ゆるいカーブをえがいて、はるか遠方へ列になっていた。書物の絶壁だ！ — その荘重な歴史の凄みに圧倒され、私は、ただ呆然と立ちつくした。

さて、平成3年（1991）、富士見の旧本館が解体され、その並びに現本館が建ったが、構内にはまだ新旧の建物が混在していた。早稲田通りから奥裏には、2号、3号、4号の古い号館が残っていた。平成15年、旧本館跡地に本館に並べて7階建を新築することになった。

それは、手狭な駅前病院から臨床系講座を移転すること、2号館の図書館、3号館の九段ホール、3号館の共同利用研究施設等に移し、3つの号館を解体する大プランだった。

本館と新築館は、1階だけを接してワンフロアに設計される。図書館は、駅前病院に近い、1階ホールから望めるエントランスの顔として位置づけた。

「本の壁をつくれ」。そのとき私は、ひとつだけ注文をつけた。図書館長の中原レチ子（レチ子）が、基本図面を担当した。書物は知識情報の宝石であり、部屋を飾る品格ある装飾である。1、2階を吹きぬける開架式書棚、事務室、地下1、2階は書庫。図書館は357㎡（108坪）なので、高さも広さも足りなかったが、館内は意匠と工夫を凝らした。

折よく新館は、平成18年（2006）の本学100周年の年に竣工したので、100周年記念館と命名された。図書館は狭いだけに入口をはいると、見あげる本の壁が傾斜してくるような迫力があつた。

それから5年後、平成23年（2011）3月11日、本学第100回卒業式の午後、東北地方大地震が関東をもゆるがした。都内の図書館は、一挙に本が書架から崩れおち、床はゴミの山の惨状を呈した。本学100周年記念館の図書館は、一冊の本も落ちることはなかった。

（“本の壁”には少々遠いが、独特の雰囲気につつまれた吹きぬけの書架）